

教学半

2023. 1. 11

「教学半」と書いて、「きょうがくなかばす」と読むのが一般的である。孔子の「書経」に出てくる言葉である。原文（白文）は、「教学半。」であり、書き下し文は、「教うるは学ぶの半ば（なり）。」である。

人に何かを教えることは、その半分は自分にとっても勉強になることという意味である。教えることは学ぶことであり、学ぶことによって教えることができるという意味である。インプットしただけでなく、アウトプットすることで初めて効果があると言われる。

人に教えるために内容を確認するなど学び直すことで、自分の中で理解を深めるきっかけにもなる。また、相手からの疑問や質問により、新しい視点を得ることもでき、自らの成長につなげることもできる。あるいは、教えられるようなレベルにならないと、本当に学んだことにはならないという意味で使われることもある。

自分では、理解したと思ったことを、相手に説明しようとしたとき、うまく伝わらないことがある。質問されて、思ったほど自分の理解が進んでいないことを思い知らされることもある。こういったことは、今までに何回もあった。

自分で理解できていないと思う言葉は使わないようにしている。例えば、もうずいぶん前になるが、「メタ認知」という言葉を知った。解説を読むのだが、何だかわかったようなわからないようにで釈然としない。

そのうち、この言葉を使う人が増えてきた。私には、ある疑問が浮かんできた。「この人たちは、本当に意味がわかって使っているのか」その後、わかったようなわからないような言葉を次から次へと聞くこととなる。「見取る」「見える化」などである。さも、その言葉を使うことがステータスであるかのようである。

多くの先生方が使う言葉に「学び」がある。これも気になる。あまりにも安易に使いすぎる。学びというものは、そんなに簡単なものではない。こんな感じなので、私は、未だに「見取る」も「見える化」も使わない。「学び」さえ使わない。どれも、違う言葉を使って説明している。違う言葉に置き換えている。

ところが、「メタ認知」は使うようになった。ここまでくるのに、20年以上を要した。あるとき、急に腑に落ちたのである。そういうことかと。確か「振り返り」の勉強をしていたときだった。「隠れたカリキュラム（ヒドゥン・カリキュラム）」もそうである。20年以上の歳月を経て、ようやく使うようになった。

「教学半」のためには、知ったかぶりをしないことである。わかったような気にならないことである。常に自問自答である。「お前は、本当にわかっているのか」と。また、その言葉を相手に合わせて翻訳できるかである。翻訳できて、ようやく人に教えることができる。大事なものは、謙虚に学ぶ姿勢であろう。